

公民館だより

59.6
田地区館
公民館

本年度由良公民館活動方針

◎理念

- 一 公民館活動の基底は、人間尊重の精神である。
- 二 公民館活動の核心は、生涯教育の態勢を確立するにある。
- 三 公民館活動の究極のねらいは、住民の自治能力の向上にある。

◎目標

- 一 明るく住みよい由良にするために、みんなの知恵を出し合い、努力していただく。
- 二 互に相互の連帯を深める。
- 三 教養やスポーツ、趣味などを通じて、健康で明るい人間関係を育てる。
- 四 社会教育団体や関係機関と連絡調整を密にして、公民館活動の充実に努める。

◎努力点

- 一 話し合い活動の推進
生活会議及び自治学級の開設
あいさつ運動の推進
- 二 健康と安全教育の推進
スポーツサークル活動の推進
各種球技大会の開催
- 三 文化活動の推進
無形文化財保存会の設立
文化祭の開催、盆踊りの振興

由良公民館長 藤本秀雄

報告(一) 主事 平間克己

一 昭和五十九年度

(順不同・敬称略)

- 運営審議会委員
- 中西嘉壽郎 自治連合会長 浜野路自治会長
 - 坂下平太郎 脇自治会長
 - 中西源兵衛 宮本自治会長・市議会議員
 - 川崎利晴 港自治会長
 - 新宮義男 下石浦自治会長
 - 藤本長太郎 上石浦自治会長

62

二 本年度の事業

(一) 公民館

- 山下伊齋 市議会議員
- 四方寿朗 前公民館長
- 荒田昭三 由良小学校長
- 山下栄一 由良幼小育友会長
- 飯沢登志朗 栗田中学校教育友会長
- 小室二三子 由良婦人会長
- 山下伊東 由良老友会長
- 山田孝一 由良子供会連絡協議会長

(二) 成人式 一月十五日

- ◎ 該当者の確認、連絡及び当日の世話
- ◎ 新生活運動、自治学級、あいさつ運動
- ◎ 文化部

- (一) 公民館だより 年三回(六月・十月・三月)
- (二) 座談会 由良を良くする会
- (三) 盆おどり 八月十四日 由良小唄を中心
午後八時より午後十時まで
- (四) 史跡めぐり 八月二十六日(日) 福知山方面 公民館関係者の研修のため
- (五) 文化祭 十一月十八日(日) 婦人会、ピアニ・エレフトーン共催
- (六) 囲碁大会 二月三日(日) 第四回地区対抗

(三) 体育部

- (一) 由良ヶ岳登山 五月二十七日(日) 雨天中止
午前九時出発 午後三時下山
- (二) 第四回団体対抗ソフトボール大会
午後一時より午後五時まで
- (三) 球技大会 八月十四日(火) 雨天中止
四部対抗 青年男子軟式野球
一般男子ソフトボール
- (四) 第五回四部対抗男女バレーボール大会

二月三日(日)

のスポーツサークル 毎週

剣道(火・金) 卓球(日・バドミントン)
(水・土) バレーボール(木・日)
野球・ソフトボール(不定時)

部員(敬称略)

部長 大森 章弘 副部长 岸田 剛
部員 石田 正敏 森本 松二

中西 隆光 田中 昭義

中西 英貴 酒本 茂樹

岸田 秀樹 酒本 ゆくの

中西 正代

剣道講師 小室 文雄 安藤 義政

頼野 吉也 北野 薫

◎文化部の盆おどりの行事計画の中で、毎年盃蘭盆であった八月二十三日を、今年から新盆の八月十四日に変更した。

報告(二)

一、第十九回由良ヶ岳登山 五月二十七日(日)
今年には近年稀に見る豪雪のため、安全を期して五月二十七日に決った。
それに、私達登山者のため、毎年登山道の

清掃をして下さる観光協会の八十人の会員も、当日は私達より一時間も早く出発し、頂上まで清掃して下さいました。こうした観光協会のご奉仕のお陰で、無事登山出来るのです。有難いことです。

その上、当日の天候は午後より一時雨との予報で案じられていたが、一粒の雨も降らず快調であった。尚、当日の参加総数は一七七人で、由良の外、宮津、網野、西舞鶴方面からの人もあり、宮津ガールスカウト親子ニッ三名の団体参加もあった。

中でも、三歳の愛児が眠ったので、背負って頂上を極めた若きお父さんの逞しさが印象的であった。

それに、公民館も頂上と麓をトランシーバーで連絡をとり、万一の事故に備えた。お陰で一つの事故もなく無事終った。

特に、西舞鶴の眼科医の小谷澄子先生は、由良ヶ岳登山に関心を寄せられ、希望されての参加で、五十年振りの登頂であった。

その生々しい感想を、特別寄稿して戴きましたので、公民館日より(本号)に掲載させていただきます。

二、第四回団体対抗ソフトボール大会

日時 六月三日(日)午後一時

会場 由良小学校グラウンド

参加チーム OBの会・育友会・消防団・公民館(実業会不参加のため)

女子二チーム(A組・B組)

この大会は、さなぶり行争として勝敗もさることながら、親睦を目的としています。和気あいあいとしたムードの中で、試合もスムーズに運びました。

更に、今年から女子チームが二チーム(去年は一チーム)編成され、活気的な成長振りを感じ喜ばしい。

来年の第五回大会は、朝から試合開始にしたい。

成績

第一回戦

育友会 13-5 OBの会

公民館 5-1 消防団

女子チーム

B組 17-8 A組

優勝戦

公民館 15-4 育友会

夏を迎えて

由良駐在所 安藤 義政

今年も暑い夏が予想され、多くの遊泳客が由良の町にやってきましたが、これに伴い一部の不法者も町に來て、市民の平穏な生活を脅かす争案の発生が予想されるため、警察ではパトカー等機動力を利用して、重点的なパトロールを実施いたします。

◎ 急訴争案は 一一〇番へ

些細なことでも、ためらわず一一〇番を利用して下さい。一一〇番は皆さんの権利です。そこで、一一〇番について簡単に説明します。急訴争案で一一〇番を廻すと、宮津警察署指令室(二十四時間体制)が受信いたします。指令室では、警ら中及び待機中のパトカーに現場急行を指令するとともに、受持ち駐在所にも現場急行の指令を出し、パトカー及び駐在所員が合同で争案の処理をすることになっております。

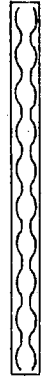
現代の複雑、広域化した犯罪の処置について、警察では、従来の一駐在所の現場処置

ではなく、組織力を活用して、犯罪の防止を期する体制を整え、住民の期待に応えるべき活動を実施し、着実にその成果が現実に表示されております。

「一一〇番は、住民を守る伝家の宝刀です。」

「駐在所からお知らせ」

今夏も昨年と同様、七月十四日から八月十九日までの約一か月間、駐車禁止の臨時規制を同一区域で実施いたします。皆さまのご協力を、よろしく願います。



丹後由良駅からのお願い

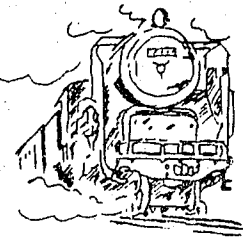
丹後由良駅長 藤田清四郎

由良地区の皆さま、日頃は丹後由良駅のご利用有難うございます。

最近の丹後由良駅の乗車状況ですが、乗車人員はマイカリの普及により昭和四十年をピークに減少が続き、定期の乗車人員は、二十

六十周年を迎えて、臨時列車の運転、記念入場券の発売等も計画されております。皆さまの一層のご協力をお願いいたします。

国鉄では、年間を通じて団体旅行を行っており、当駅の待合所に「チラシ」を置いておきますので、旅行の資料としてご利用下さい。また、テレビ等でご存知の、国鉄全線グリーン車で乗り放題の、女性専用「ナイスミディパス」(現在発売中)、「フルムーン夫婦グリーンパス」(九月後半から発売)があります。グループ旅行、家族旅行等には、気軽に丹後由良駅にお申し込み、お問い合わせ下さい。



お願いごとばかり申し上げましたが、皆さまの由良地区が、今後ともますます発展することを念願しており、少しなりとも寄与できれば幸々と思っております。

入選標語

乗車の輪

広げて守ろう 宮津線

四万二千人が、八万六千五百人に、定期以外の乗車人員も、九万二千七百人が、三万三千人と、どちらもピーク時の三十六パーセント台と大幅に減少しております。

宮津線の廃止問題もございませぬ。今まで以上に宮津線と丹後由良駅をご利用願って、乗車密度の減少に歯止めをかけ、上昇させることが必要だと思っております。今後とも由良地区皆さまのご協力とご理解を頂き、丹後由良駅をご利用いただくことが一番の特効薬です。

当駅では、宮津線内の乗車券以外にも、東舞鶴、小浜、綾部、園部、福知山、石生等各駅の近距離乗車券も発売しております。また遠方に旅行される場合の指定券、乗車券、それに回数券等も早目に連絡を頂ければ当駅で手配させて頂いたりますので、せいぜいご利用下さい。

秋には、慣例の「いのこ旅行」があり、天々の羽衣で知られた中三保の松原と日本平の旅。旅費は、二万九千八百円で十月に予定しております。多くの申し込みをお待ちしております。

十月十四日の鉄道記念日には、宮津線開通

昭和五十九年五月二十七日

由良嶽登山

由良小学校々庭午前九時集合。訓辞の後、早速並ぶことなく大塊りて、また、三三五五出発。由良国民宿舎裏側に立ててある「由良嶽登山口」。「登山時間一時間十五分」の道標へ一歩足を踏み入れた瞬間、サアッと身がすくむ。「けがのないように元気で登山して下さい。」の訓辞が改めて脳裏に蘇る。大丈夫だろうか。五十年? 振りの念願。是非完遂したい。と念じつつ、だんぐりと気分が落ちついた。

「ハア、ハア、ハア、ハア」と水漬までが共鳴して来る。うしろからまるで私の後見役の様に平間さん。「山登りは世間話をし下ら歩くと比較的楽ですよ。」と、役職とはいへ、土地の健脚者のペテランがおっしゃる。暫く間をおいて、「私は息をつづけるだけで精一杯です。」と無愛想に答える。胸内が舌ツルツル。心臓も動悸がはげしい。ハア、ハア、ハア、ハア。やっとな鼻だけ一寸ました。「この辺で

「休みしまひようか。」と二十分もすると云
って下さる。心臓は苦しいが、足はいけそう
だ。「もう少し歩けそうです。」と登りつづ
ける。

先を争って登って行った子供達、その父母、
幼児達は休んでいる。学校から登る時は、十
五分間しないと休めないが、今日は好きな時
に休めるからいいと楽しそうだ。

約三十分後、遂に一休み。切り株に腰を降
して、リュックをはずすとスリットと楽になり
勿体ない様だ。

「サアッ」と腰を上げる。持参した杖が邪
間になる。よつん這いの採になって、雨水の
流れの挟水道を登るには、杖よりも今朝七
時出発されて、通路の柴刈り先発隊の方々の
刈り残された雑木や根っ子の方が余程力を貸
してくれろ。根っ子等は他力本願、杖は自分
でつかなければならぬので、自力本願だ等
と考える。

三度目の休憩で、我慢していたお茶を半杯
呑んだ。胸が「スリット」として、口の中が
「サラッ」とした。これをまさしく清涼飲料
水。「一杯水まで行けば頂上はすぐだ。一杯

水は来てくれないうよ。こっちから歩いていか
んとなあ」と引卒の主催者の方が、二・三人
の子供のリュックを持ち下らおっしゃって
らっしゃる。ああ、早く一杯水まで行きつぎ
たい、どの辺なのだろう。

胸は幾分楽になったが、やがて足がついて
来なくなった。それでもどうにか、右の次に
左、左の次に右と、交互に通う。有難い。多
分登りされるだろう。

「この辺から農林省の管轄で国有林です。年
間を通じて、技の伐採、下草刈りと手入れを
します。」十五年余りを経たと思われる杉林
は、うす暗くさむい。

やつと「一杯水」へたどりついた。うれし
かった。「飲みますか。」「さっきお茶を
呑みましたので止めておきます。一寸覗い
ます。」

竹筒の先から、岩間へ美しい細い水が音を立
てて流れ落ちていく。フト気がつく、つづ
ら折れの山路の三、四段上を子供達と元気に
登っていらっしゃる平間さんの姿が見えた。
おもホッと一安心した気分になって、ついで
果敢い足を通わせたら、この辺りから目につ

き出した大人の背丈ほど伸びた道端のせんま
いの群生に見栄けたり、刈り落されたわらび
を拾い上げて、勇気を出すよすがとした。

柴、草刈りの方々が、元氣よく小走りに降
りて来られるのを早くからジッとして待ってい
るのは、手に持っていたら「な」や
「鎌」がこわいのも、敬意を表しているの
でもない。唯一の休息の姿なのだ。

漸く頂上間近かか、にぎやかに子供達のざ
わめきが聞えて来た。併し、足の運びは一向
変らない。これが本当に限界という状態なの
かと合点し下ら、やつと色とりどりの服装と
お弁当を食べている明るい中へ足を踏み入れ
た。つづいて、道々お聞きしての十三まい
りの子供達が運び上げた小石。また、之を築
き上げ、石の高台の上は、十重二十重とつづ
く山並みを背景に建立なされた、中西と作操
カ作の石の祠の「虚空蔵菩薩」のおやしらの
前に顔さ、一礼してやつと心おんだ。

祠のある高台は、三、四米位位であるが、
六四七米の頂上は、風当りが強く汗ばんだ
肌はひんやりした。時に十一時四十分。
大至急降りて、見晴らしのよい風のない場所

を選んで昼食。思案し下ら大山盛一杯とつめ
たご飯も、お茶も、また、果物とペロリとた
いらける。

由良川をはさんで、由良川筋も由良の町並
みも神崎も、また、由良の鉄橋でさ之ボヤ
リ霞んでいく。むさぼる様に双眼鏡を、望遠
レンズを覗く。かすんだ下界は、やはり肉眼
と同じ様に冠島も越前岬も、おまけに水平線
までも見せまくれない。而も、狭い範囲の、
「ワンポイント」だけ。

霧で名高い摩周湖。湖水の透明度は、世界に
誇ると云われ、霧にはかたない。摩周湖ら
しい霧の底をまさぐった道楽の旅。

若狭湾の水平線の彼方までもとあてがれた、
五十年振りの登山。時間的に、エコーミッシ
ュに、そうして、また体力的に再び実現する
ことはないだろう。

皆さまに遅れはと、お腹のおちつきを待
って早々に、カメラも双眼鏡もリュックに納
め、それをも心を残し下ら杖を片手に、軽や
かになつた気分と足とりで一歩々々ゆっくり
と降りる。よつん這いになつて登った山路は
今、及び返って歩いていく。二重焦点レンズ



の「めがね」が足許をおぼつかなくさせる。その代り、杖がコックと助けまくれる三本足。自力、他力そして気力の三本建。杖の有難さを初めて知った感じ。ガサ／＼とドヤ／＼と近づいてくる子供達。見馴れない顔なのだ。「オバチャン、トレーニング」、何処から来たの、等と聞く。「コンニチワ、先へ行っていいですか、何となく、いつの間にか追い越されている。朝のうちに見た、頂上まで四十五分の道標をすぎ、頂上まで一時間の道標まで来た。腕時計を見れば、下山にこれこれ一時間かかっている。時々うぐいすの鳥の鳴声が遠くから登んで流れ、名も知らない鳥の鳴声が近く聞える。豪雪に見舞われた今年の晩春、初夏の山には、

もう花も少なく新緑一色。蚊も毛虫も蛇も姿をみせない。そして観光登山とは違い、見晴しも悪い。自然そのままのおのずから出来た操り山路。誠に静である。「春のうららの隅田川……」みかんの花が咲いている……「からたちの花が咲いたよ……」次から次から古い歌が口をついて出て来る。遂に登山口にゴールイン？、パッと視界が開け、由良の家並みがまぶしく美しい。平間様を始め、主催者の皆さま、参加の子供、御父母達の暖い絆にホロリと感謝して大成功。

登山記念のスタンプを頂いて、免許証が一つふえた感じ。由良の皆さま有難うございました。かけつけて飛び乗り、一時半、車中の人となる。由良嶺の東嶺と西嶺を初めて、また、改めて車窓よりたしかめやら。

五十九年五月二十七日夜半記す

小谷 登子



思い出 岩上 松太郎

今生きていたら百一歳になる亡父が、若い頃（二十歳の頃）伊勢参りをした話をしてくれました。それによると、着物の裾をからげ、荷物はふりわけにして肩にかけ、わらしがけで京都までは歩いたそうです。第一夜は梅迫に泊り、次の夜は殿田に泊り、三日目に京都へ着き、それから先は汽車に乗ったということでした。

私が尋常三年の時、眼を患い、京都大学病院へつれて行ってもらった時は、深夜の一時か二時頃に起こされ、父につれられて歩き、和江からは渡舟で中山へ渡り、またほの暗いのに狭い山道を歩いて福井へ出、舞鶴発の一番列車に乗って京都へ向いました。この時初めて汽車に乗ったのですが、車輛型式は、俗称マツ千箱といわれる箱車で、縦に通路がなく、トイレもない旧式の不便なものでした。然し、速度が早く電柱が後方へ飛ぶ様に見えるのと、トンネルに入ってから窓ガラスを閉じるのを忘れてみると、暫くの間車中が煙で一杯になったことが印象的でした。

帰りは、舞鶴からは石田の爺さんのひく人力車に乗せてもらって、眠ってしまいました。間に帰りつき、辛うじて京都へ日帰りしたのでした。

こうしたことがあってから、四年後には宮津線が開通したのですが、それにつけて忘れることが出来ないのは、鉄道工事中のことです。この工事は、閉鎖社会に居住していた村民達にとっては、大きく外海の空気を吸うような経験に曝された様に思います。そう思われるほど一時に多数の村外人が入り込み、何か村全体が喧騒になって、物心両面に大きな影響を及ぼしたのですが、子供の私が、それらの事情を身近に見聞した小さなことを列記してみ、それを窺知する資料に供してみたいと思います。

一、私方の近所の小室さん方に、石川という請負師が陣取っていました。四十歳位で、今思うと実に典型的な勇み肌のパリッとした親分だっと思えます。若くてきれいないつも日本髪に結った奥さんがいました。多数の子分達が出入りして、賑やかなことでした。大きくて真黒な「熊」という犬が

はなし飼いにされており、闘争心が旺盛で他の犬を見つけるといつでも敢然と攻撃する犬でした。それがまた強くて、常に相手を圧倒するので、私らは快哉を感じ「やれやれ」とけしかける様な気持ちでみていたのです。

この家の前に居ると、よく親分が酒気を帯びて大声で喋るのが聞こえ、時には誰かを怒鳴る様な声が聞こえて来ることもあって、多少薄気味悪いこともありました。然し、土着の村民達とは、これといった磨擦もなく、格別悪感情を持たれることも無かった様でした。

二、また、近所の石田さん方には、和田という親分が陣を構えていました。この方は全然肌合の異った六十歳位の温厚な親爺さんでした。

この親爺さん、ある時パリッとした狩猟のいでたちで銃を肩にして出掛けに来るのに合いました。そうして私ら三人は、いっしょに行こうというのでついに行きました。私は、一見してこの親爺、狩猟の玄人ではないと見込みました。金比羅さんの裏山で

腐った大木の切株に多数の蜂が群がっているのを見るや、銃を持直して、これを射とうという姿勢になったので、私は止めたのですが聞かず、遂に一発射ったのです。案のじよう蜂の大群は、一斉に跳んで私の方へ襲撃して来ました。ところがこちらは子供の事、足早に下に向って走ったので被害はなかったのですが、親爺さんはそうはいかず、赤くなった首筋を押さながら、よた／＼物も云わずに帰って行きました。家では、恐らく医者よ、茶よと騒いだことでしょうが、そも／＼銃で蜂を射とうという発想が、狩猟にはすぶの素人の証拠に思えておかしかつたものです。

三、この頃の工事は、殆どが手作業で進められていたように思います。稲荷さんの裏山の掘削工事を見に行きましたが、工事の中心をなす最先端で、土を切取る作業は、恐らく作業人夫中のエリートと思われる大鶴崎を頭上から大きく振回して、土に打込んで切崩して行きました。後方の人達は、それをかき集めて、トロッコに積載する作業

をやっていました。今日から見ると全く幼稚なことだつた事です。

四、作業は、殆どが手作業ばかりでしたが、中で一番熟練し巧妙だつたのは、コンクリートの攪拌作業だつた様に思いました。鉄板の上に、砂と細石とセメントの混ぜたものに水を注ぎ、これを作業員二人が両側から小型のスコップで「ホイ／＼」とかけ声をかけながら攪拌するのですが、その手並は中々熟練したもので、そう誰にでも即座に出来るものでなく、頗る能率的だつた様に思いました。

五、トンネル作業に行く人は、皆ガスのカンテラをさげま行きましたが、私らにとつてはそのカンテラが珍しく、時々作業員の子供が持ち出して来たカンテラをいじりまわしたものです。どうしたら灯がつくのか、灯を大きくしたり、小さくしたり研究したものです。

こうして宮津線が開通し、この地方の開発発展にどれ程大きく貢献したことが、計り知れない存在だつたものが、今や時代遅れの物

の様に思われ、廃止が云々される様になつたということ。真に時代の移り替りの早いのに驚くばかりです。然し、私は回顧趣味やなじみだけを思うのではなく、大きく見た場合、この鉄道は、まだまだ残してほしいものと、切に願うのであります。

